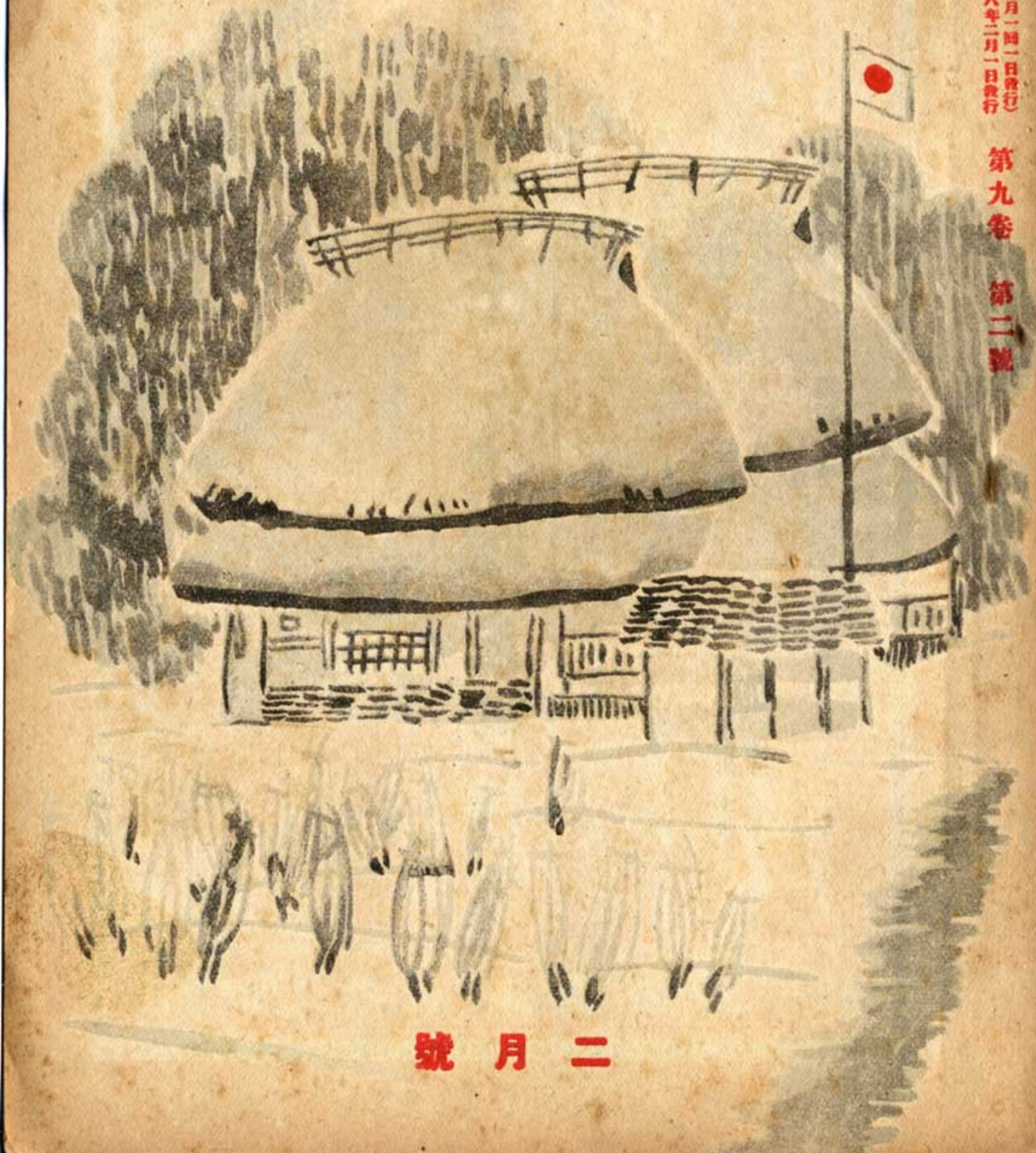


土 淨

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
（每月一回一日發行）
昭和十八年一月廿日印刷本
昭和十八年二月一日發行

第九卷 第二號



號 月 二

陸病
海軍
院

慰問淨土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「淨土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の淨土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數

知恩院門跡
淨土宗管長
增上寺主

新刊

稀代の善知識に私淑せよ

郁芳隨圓猊下
序・増谷文雄著
大島徹水臺下

行誠上人

◇近世不世出の高僧、行誠上人の全傳成る◇

謹嚴にしてしかも脱俗洒々たる上人の風格は最大の魅力！上人の言行がそのまゝ信仰である。

學識に德行に一世に秀でた上人によつて、廢佛毀釋にあつた佛教界が指導された。更にまた上人の和歌、詩、書、畫はみな一流一家をなしてゐた。文の簡麗なる、筆の猷美なる他に求むべくもない。上人に傾倒する著者が渾身描き出した興味つきざる近來の名著。

B6版二百三十頁
定價一圓五十錢
送料十二錢

言説・行業は直ちに讀者
を感化せずにおかない！！

内容

口繪・序文

一、學僧としての行誠上人
上人はかく學び給ふた・學問に於ける主張と業績

二、高德を偲びて

上人の風格のこと・芳躅をたどりて・遺書につきて

三、御一新の渦中に立ちて
廢佛毀釋の真相につきて・肉食妻帶とたたかふ・毅然として識見を持す

四、上人の文藻に就きて

上人の短歌に就きて・上人の紀行につきて・上人の詩と書と畫につきて

附録

著作

浄土二月號 目次

表紙・扉・目次カット……………河村夏孝

近藤裕子……………大島徹水……………(一六)

聖典講義 長期戦に處する心……………大野法道……………(一八)

冬の幸福……………吉田絃二郎……………(四)

隨筆神か佛か……………中野尅子……………(二四)

西峽盛雜記 春を待ちつゝ……………佐藤賢順……………(一八)

實話靈の堂守……………石橋徳作……………(三)

趣味の中菊づくり……………松濤芳俊……………(一六)

信仰相談……………中村辨康……………(三)

香爐の御手印……………藤本幸一……………(四〇)

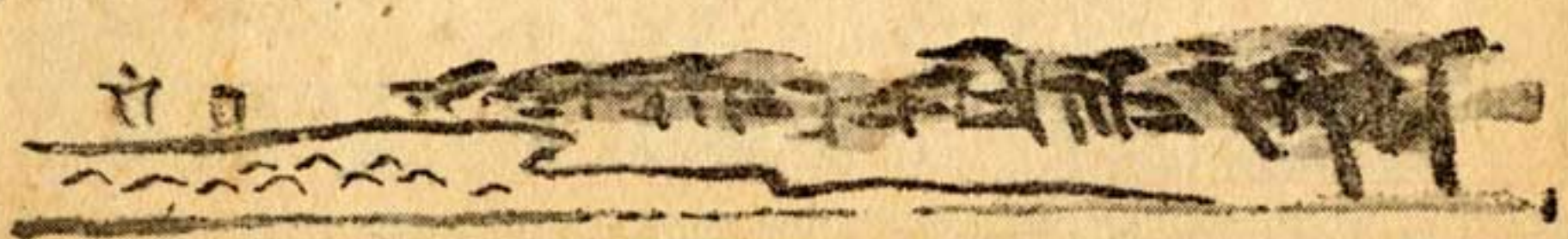
隨筆中將姫物語……………高橋良和……………(三)

部隊長の手紙……………石原宥政……………(一六)

歌俳壇……………岩野喜久代選……………(二)
壇……………太田耳動子選……………(四)
漫畫決戦又決戦……………漫畫協團……………(一四)
一口法話……………(三九)
節分と豆まき……………(二三)
會のたより……………(四二)

法語解説 正しき信仰のすがた……………中村辨康……………(四五)

編輯 後記……………(四九)



淨
土

人の命は食事の時、むせて
死することもあるなり。南
無阿彌陀佛とかみて、南無
阿彌陀佛とのみ入るべきな
り。

法然上人御法語





冬 日 の 幸 福

吉 田 絃 二 郎

いつもは十一月の末に花を開くわびすけが十二月になつても堅い蕾のまゝで、今年の元旦にやうやく一輪だけ綻びた。

わたくしのやうな生活をしてゐると、花の咲く季節や鳥の訪れて来る日までが關心事となる。花は梅、辛夷桃、櫻、丁子、杏子、石南花、山吹、さつき、芙蓉、木犀、鳥は鶯の笛鳴きをはじめとして、のじこ、かしらだか、四十雀、雲雀、三光鳥、懸巢、鶉、繡眼兒、鶉、青鶉といろいろの鳥を待ち暮らす、梢のいたゞきに四十雀の高鳴くを聴けばいよいよ春のしるしとおもひ胸も高まる。たまたま庭の隅に鶉の來鳴くを聴いては蕭瑟の晩秋に胸を傷める。

ことしの春は天氣がよく、風もなく、犬を相手に庭に出ては日向を楽しむことができた。本を讀むも、手

紙をしたゝむるも、原稿を書くのも庭である。足高の籐の卓子の雨露に壊たれてゐるのを繕ふて、硯箱と筆と硯滴とを載せては、日光を追ふて卓子を運ぶ。わたくしが動くところ犬もかならず動く。

二十年も前から神経が衰へてゐるらしく人と逢ふことは苦しいが、日向を追ふて卓子を運び、犬を相手に思惟するでもなく、讀書するでもなく庭に突つ立つてゐる時間は、現在のわたくしに取つて尊い時間である。

わたくしに逢ひに来る人の中には、人生について何かを求めに来る人がある。これはわたくしに取つて一番苦しい相手である。

人生についてわたくしはまだ何も知



死んでしまつたらはじめて人生といふものはわかるのであらう。一度此方の岸から彼方の岸へ渡つて後はじめて此方の岸の人生といふものの姿がはつきりわかるであらう。

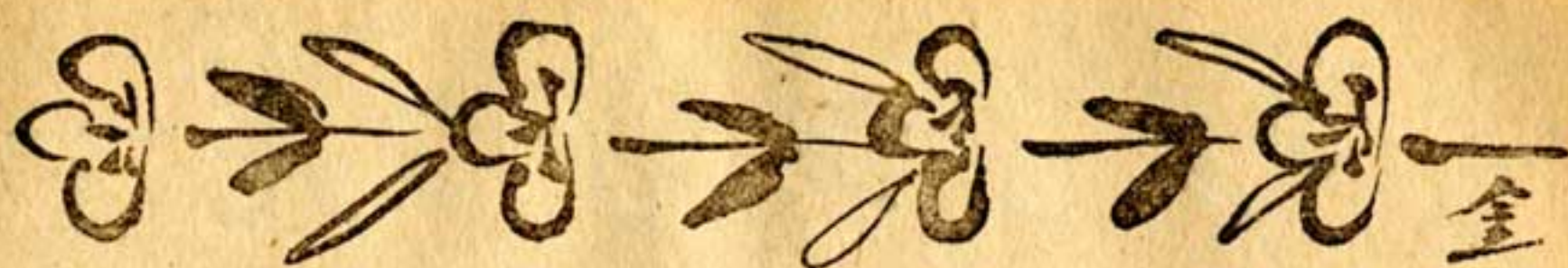
若い人たちは觀念の上に人生を築き上げようとす。人生とは畢竟、かれ自身が何の深さにまで、何の高さにまで、人生を生き貫いたかによつて決定する。孔子の高さにまで生き得た人にとつては人生の姿は孔子が實感し得たと同じほどの高さを持つてあらはれて來るであらう。

人生とは如何に考へるかの前に、先づ如何に生きるかに依つて決定される。いかなる哲人も、もしかかれが悪しき隣人であるならば、人生について、概念の他何ものをも見出し得ない。

高山の雪溪を踏み、險峻の尾根を攀ち、幾度か死生の境を賭けてこそ山の味はわかる。

人生は本來無である。無なるがゆゑに無限である。空々寂々の人生を送る者にとつては人生は無意味であり、虚無である。人間として高きに思惟し、人間として神のごとく生きんことを努むる者にとつてのみ、人

生は悠久の姿を示唆するであらう。いかに考ふるかの前に、先づいかに生きる



生きることを餘儀なくせらるゝ。

×

昨日は山上の鎮守の森は身を切るほどの寒い風が吹き荒んでゐた。わたくしたちは召されてゆく若い人々を社前に送つた。日支事變このかた、社前に集まる人の数は度毎に多くなり、人々の顔はいよいよ眞剣になつて來た。ほんたうに喰ふか喰はれるかの戦ひを戦つてゐるといふ引き緊まつた心持ちが一人一人の胸に迫つてゐることを感じないわけにはゆかなかつた。

昔蒙古來におびえた人々の心の緊張を想ひ出すが、昨日今日のわたくしたちの心にはさらに大いなる國難來の意識とさらに大いなる苦闘の後の光明とが湧き立つてゐることを感ずる。わたくしたちはまたとない時代に生まれ合せた。

送られて行く若者たちの言葉は實に短く、簡明であつた。眞に死生關頭に立つて豁然として大悟せる者の尊い姿とはあの勇士たちのそれであらう。

×

今朝は黒い飯が食膳に供へられた。ありがたいことだと思つた。合掌して靜かに箸を執つた。



して、耐へがたく思ふこと數日にして、大雨を惠まれた。

武藏野に立つて、丹澤と秩父の中間くらゐの空にあつて雲を見れば、數日にして雨雪の訪るゝことを知るやうになつたのもそのところからのことであつた。

天道のみでない、わたくしたちの生活が引きしまつて來れば來るほど光明の日は近づいて來るのである。

耐へ切れないほどの苦しみを耐へ忍ぶ時はじめて天道の慈雨は降り灑がれる。勇躍して生活の苦を忍ぶ者のみに光明は惠まれる。

けさの靜かな雨に麥も辛子菜も梅も山椿もよみがへることであらう。軒を打つ雨の音を聴きつゝわたくしは天道の無限なる慈悲を思ふ。

×

いかなる境涯にも人生の幸福はある。

わたくしは冬の日溜りにゐて仕事をつゞけることにも幸福を見出す。讀書や仕事に疲れては犬とともに遊ぶことにも幸福を感じる。孤獨の生活にとつて犬は人間に劣らぬほどの慰めをあたへてくれる。

わたくしにとつて一ヶ月に二度三度東京に出て行かなければならぬといふことはいさゝか苦痛である。その日はわたくしは犬とともに讀書し、犬とともに仕事を つゞけ、犬とともに武藏野を歩くことができないからである。

わたくしはまた睡眠の幸福を感じる。

わたくしは起きてゐる間、できるだけ多く肉體を疲勞させることを努める。そして幸福な睡眠を工夫する。

わたくしは朝ごとに空を行く飛行機の音に眼さむる。そして寒空を翔ける勇士たちに感謝をさゝげつ



長期戦に處する心

(歎佛偈講義……九)

大野法道

吾誓ふ、佛を得るまで 普く此願を行じて

一切の恐懼に ために大安を作さん

之は第十偈である。この前の第八偈には佛格の成就を願ひ求め、第九偈には佛に通ずる道としての六波羅蜜の生活を行じ抜かうとする願ひが説かれたのであるが、今この第十偈はそれらの二つの願ひを結んで、固い誓ひが立てられるのである。

その誓ひについて、「佛を得るまで、普く此願を行じて」と、見定めた目的がしつかりと掴まれてあるのを、よく味ふべきである。苟くも一旦目的を立てた以上、それを達成するまでは、いかに長期に亘ることであつても、いかなる事が起らうとも、決してその目的から眼をはづすやうなことがあつてはならない。目々の心構へが、すべてその目的に向つて集中して居らねばならぬし、張り切つた心が途中で弛んだりなどしてはならない。

今、法藏菩薩は世自在

の一心を貫きたまひし、法藏菩薩の生活に見出すことがで
きるであらう。

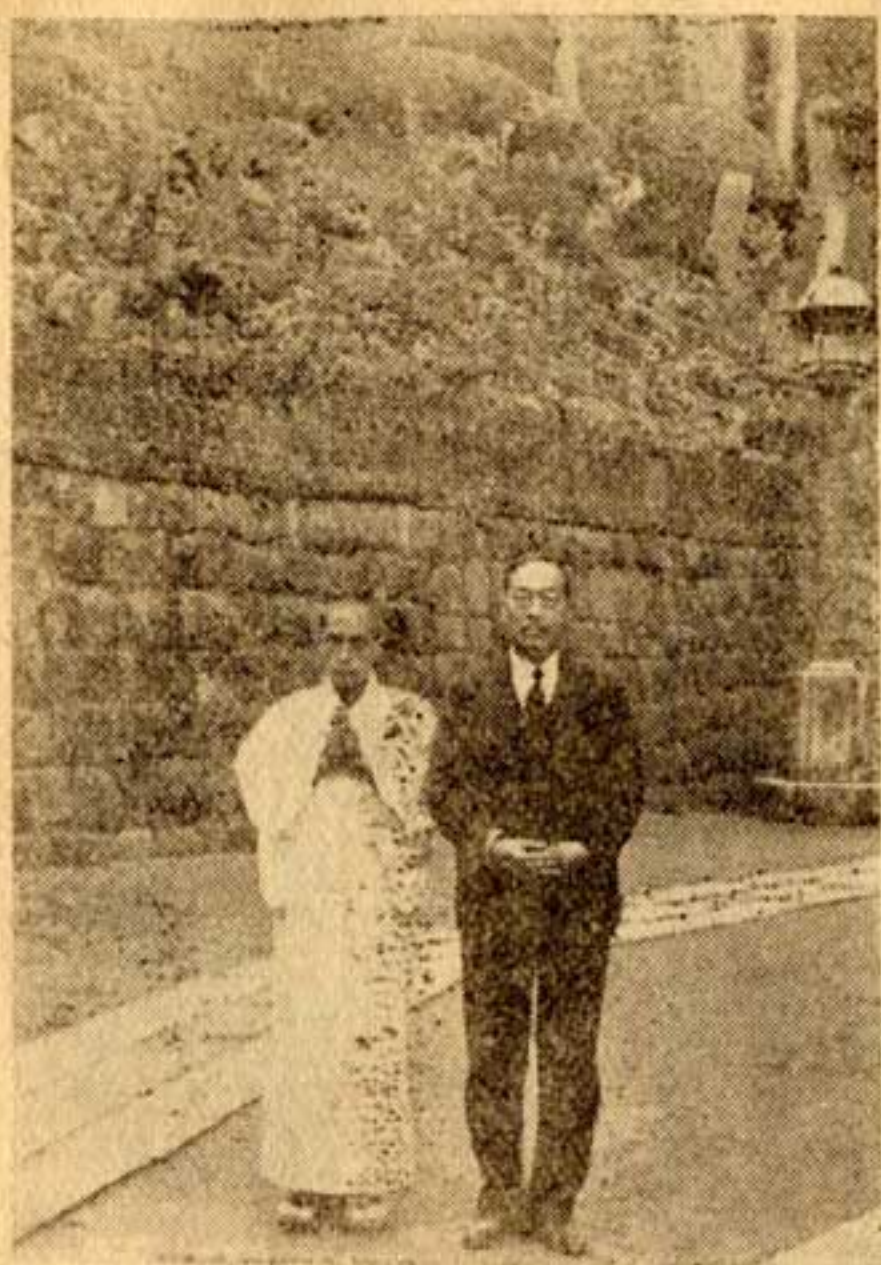
法然上人は、専ら阿彌陀佛を信ぜられたゞけに、自然に
かうした一心について、深い體驗を持つてゐられた。上人
の言葉に、

せここに

實話 靈の堂守 (下)

貴族院書記官

石 橋 德 作



芝増上寺の晨朝會で未だ暗い内から多くの同信の人達に混つて禮拜してゐる俊一の姿は彼のことを知らぬ人からみれば世にも珍しい

篤信の青年であると感じたに相異なる。若い元氣といふ力をかりて、したい放題の我ままと欲望を満さうとし、親兄弟は申すまでもなく彼の四圍の人々に數知れぬ不快と困惑をかけてきた俊一である。結局身のお

き所もなくなつて自殺未遂となり、動機は悪いにしろとに角生死の關門をくぐり抜けてフトした佛縁から念佛三昧に光明を見出した彼である。彼の政俊が深ければ深いだけ彼の姿に眞摯なものがあつた。

そして俊一が出家したいといふ願望を抱くやうになつてからも、彼の親戚や私等は彼の熱意に引きずられた形であり、結局その願ひは間もなく達せられた。かくて俊一は静岡縣榛原郡の石雲寺



ふにつけ無念の涙を呑む事幾度か、しかしこれと申すも皆自分の過去世の深業、誰をうらむべきもなく



近藤祐子 (下)

大 島 徹 水

戦争が済んで近藤の婆さんをたづねた。その時には息子が金鷄勳章を貰つたと云ふ。また妻もめとつたと云ふので、私も安心した。

ところが、その後その息子がなくなつた。

明治四十三年のことである。泉谷へ行くとお客があるらしい。

「お客さんがゐるのか」

とたづねると

「軍人の未亡人で、近藤と云ふ人だ」

と云ふ。

「それではわしの知つてゐる近藤だらう」

と云つて逢つて見ると近藤祐子の息子の家内で夫に死なれてから思ひ切つて尼になつた、と云ふ。考へると不思議な邂逅である。因縁の妙といはうか。そこで昔の話をしたが

先方もひどくよろこんでゐた。ところが「私がこゝにゐることをお母さんに云つてくれるな」と云ふ。

不審に思つたが、その譯は夫の恩給金のこととて、近藤の婆さんは、これは親が貰ふのが本當だと主張してゐるのである。尤もこれは欲心から出たのではなく、義によつてゐた譯である。

さうからしてゐる中に婆さんに嫁のゐるところが解つて京都へやつて來た。

そこで不思議にも颯田本眞尼がそこへ來合せて伸へ入つて話をした。

私が出逢つたと云ふ様なことがあつた。

×

その後三年ばかりして、その奥さんも横の尾へ行つて死んでしまつた。

それから何十年か逢はず私が増

春を待ちつゝ

(西峽 盧 雜 記)

佐 藤 賢 順

ここは東と北と西との三方を丘陵で圍まれた平地で、谷間といふほどの



中將姫物語 (完)

高橋良和

「笙の音が聞えます。お師匠さま。」

「どれ／＼どこに。」

「ほら、あの曼荼羅の童子が節おもしろく奏でております。」

「うん、うん。」

枕元に坐つた師の信雅和尚はち／＼とうなづいてこの言葉を聞いてゐた。

「わかつた、わかつた。この信雅にも笙の音が聞へてくる。」

「お師匠さまにも聞えますか。」

中將姫はち／＼と信雅和尚の顔をみ上げた。

「わしにもきこへるよ、今になあ、あの笙の音と共にありがたい聖衆の來迎にあづかれるぞよ。」

「はい、はい、ありがたい御座います、私の様な愚痴の凡夫でも。」

「いや、この姫の心がけに賞でてもなあ。」

信雅和尚はさとす様に姫に云ひきかせた。

柳、さくらの匂ふにはまだ早い二月のはじめから床に伏した中將姫の心はもう先に九品の浄土にはしつてゐたのだつた。

その枕元には一丈五尺の浄土變想圖の當麻曼荼羅が浄土に遊ぶ中將姫のよろこびをのせてかゝげられてゐる。



神^{かみ}

か

</

部隊長の

手紙



兵の母

春場所

決戦譜

浄土まんが

決戦又決戦

作



荒 鷺
「危いから踏切のそば
で遊ぶんぢやないヨ」
「ヤア敵は白旗を出し
たゾ、バンザイ」



趣味の中菊づくり

秋光會理事長

松 濤 芳 俊

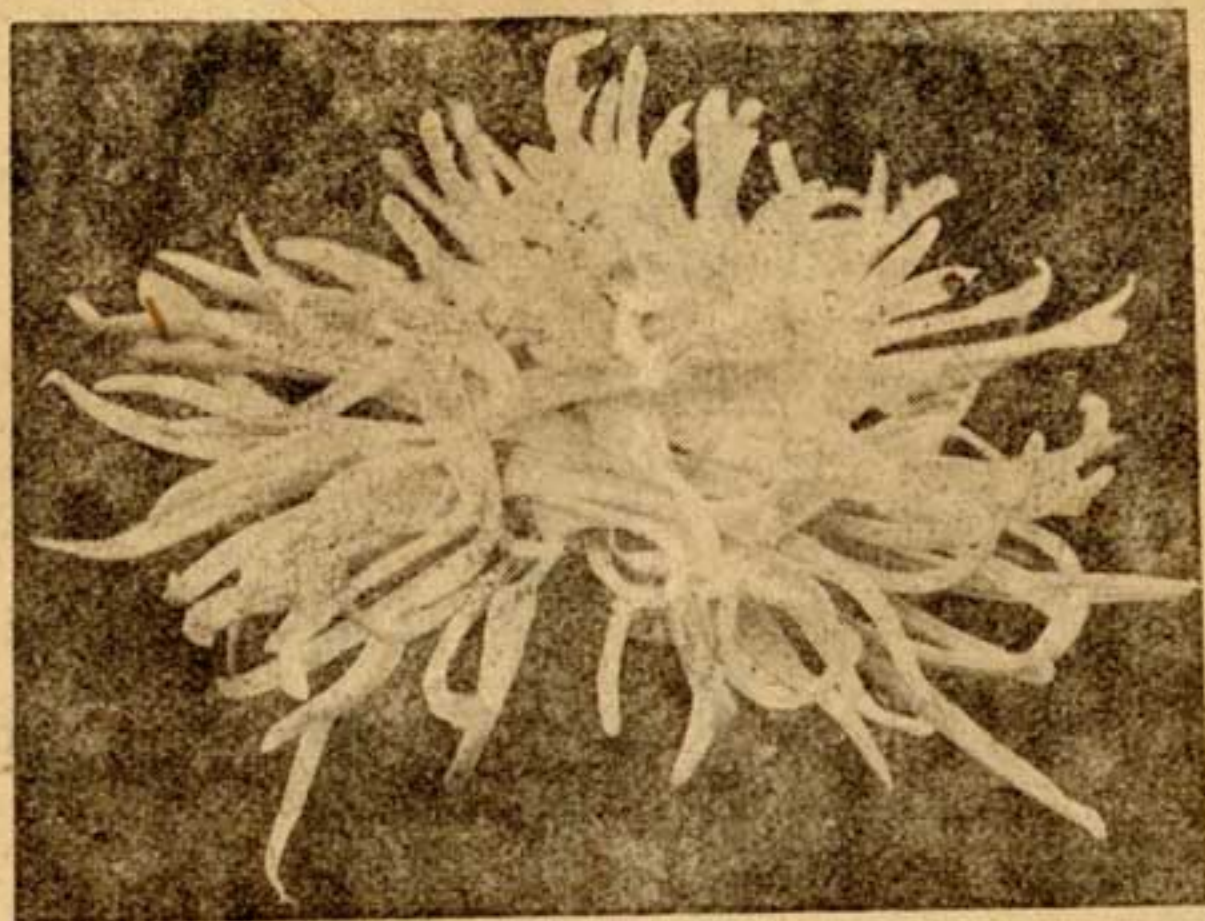
菊花は長くも我が皇室の御紋章であり、また古來國華

はされて来たものでありませうが、只今では苗も樂に手に入り、その栽培も篠立小作り盆養のやうな極簡易な方法で充分觀賞出来るやうになつてゐます。それで此の中菊と他の菊とを比較してその花の主たる特質を擧げて見ませう。

一、觀賞期が

長い

菊を三種に大別し、これを満開期の順に並べますと、大菊、小菊、中菊の順になります。大菊は十一月八日前後、小菊は同十二、三日頃、中菊の十分に才力を現はすのは同一十日前後であります。しかしこれは京濱地方の標準でありまして、地方に依り、又それぞれの性質に依り多少の早晩があるのはいふまでもありません。



この満開時から見ますと、中菊が一番晩いことになりましたが、出蕾の時期は他の菊と大體りがありません。但し大菊の早咲のものと中菊中での晩咲のものとは比較にはなりません。蕾の出来る時が凡そ同じとしますと、中菊が一番觀賞期が長いことになります。菊作りの誰もが、満開時のよりも、蕾が出来てだん／＼大きくなるまでの道程が一番楽しい

香爐の御手印

藤 本 幸 一

會ふ人毎に私はこのことをお傳へしたいと思ふ。それは餘りにも尊い信仰の御しるしであります。

「あゝ……我々が何ほど大きい聲を出して呼んでも、もつと大きいお聲で我々をお呼び下さる御聲がある。阿彌陀さまがお迎へにおいでや。本堂でお合ひ申しませう。お念佛を唱へなさい。よくみんなも阿彌陀如來の救ひを信じて現當二世の御利益を願ふべし……」

阿彌陀佛の光明はあまねく十方の世界を照して念佛の衆生を攝取して捨て給はず



法語
解説

正しき信のすがた

法然上人法語抄(其十四)</

